

トルコギキョウ



育苗

育苗用土の準備 → 用土は田土・畑土またはパーライト・バーミキュライト等と腐葉土を混合。(ピートモスは粗孔隙に乏しく、しばしば酸性化するので注意) 用土100リットルに対し5kg前後の畑の大将<青>を混ぜておくと、ガッチリ充実した苗ができる。(または肥料の半量~同量を置き肥)

散水時
葉の上から、用土まで
染み込むように、
タツプリ灌水・散布 → ●根っ酵素 → 根を強く動かし、茎を太くし、新芽の生長を促進。
①播種直後の灌水に1000倍で使用 → 発根・発芽を揃える。
②播種後30日間は1000倍、3~7日間隔 → 根と導管を強くする。
③播種後30日以降は状態を見ながら500倍で下記と併用する。

播種後40日以降
育苗後半の液肥 → ●アミノ酸液500倍 → チッソ等の栄養補給。
●花咲くCa液500倍 → 徒長させず、充実した苗を作る。
上記2種を交互に、3~7日間隔で葉上から散布。

(10アール当たり)

時期	方法	資材と施用法
本圃の地力作り	なるべく早い時期に投入し、土壌混和	●ラクトバチルス600g → 排水・通気よく、肥持ちのよい土を作る。 ●堆肥・有機物2トン以上(または米ヌカ150kg以上) ●硫安60kg ※もし堆肥・有機物の投入量が少ない場合は、NPK三成分の複合肥料を、チッソ成分12kgほど施す。
植付け前の施肥	植付け7日前迄に、ウネ上に散布 ※土作り時の同時施用も可	●畑の大将<青>60kg前後 (土壌pHを6.0~6.5に調節する) ●マンジク粒状60kg → 発根・生長促進、立枯れなど土壌病害対策。 ※特にフザリウムが心配な圃で農薬の土壌消毒をした場合、毒性が抜けた後に米ヌカ等に混ぜて、ラクトバチルスを補充する。
植付け時	植付け直前の灌水または直後の灌水時に	●根っ酵素500倍液 → 活着・根張り促進、立枯れの予防
【本圃】 灌水施用による調節	[初期] 根を強くする灌水使用 ※500倍で葉面散布も	●根っ酵素2~5ℓ (500倍程度) ※初期に太い根をまっすぐに張らせて太い茎を作り、スクスクと茎が伸びる体質にするには、十分な灌水が必要。 (少量の水を頻繁に灌水するのではなく、水分を深く染み込ませる事) この灌水に根っ酵素を使用すると、茎は強く伸び葉にテリが出て、旺盛に生長し、しかもチッソ過多にはしない。 土壌ECは0.2~0.4が適当。チッソやカリ等が過多にならないよう注意しながら、状態により適量の肥料(アミノ酸液)を投与。これは花芽分化期も同様で、出蕾期まで続ける事。
	カルシウム灌水 ※500倍で7日間隔、 2~3回の葉面散布も	●花咲くCa液1~5ℓを灌水(単用) → 鮮やかな強い開花、花弁が長持ち。 ※出蕾前にカルシウムをタツプリ効かせてから出蕾以降は灌水を控える。 ※なお、チッソ過多・カルシウム不足(例えば灰色カビ多発)の場合は、花芽分化期や開花前などにもカルシウム使用が効果的。
	液肥の灌水	●アミノ酸液2~5ℓを灌水 ※開花期前後に液肥を灌水して草勢と花の力を補う。(ただし葉色等で判断して加減し、カルシウムとバランスをとる)土壌ECは状態0.2、施用後0.4程度とする。(慣行の半分ほどの無機濃度) ※二番花をつける場合、一番花収穫直後に根っ酵素液、その後に液肥。